

春夏秋冬、 山・海・田んぼ 岩手の美しさに魅せられて



2010年に叢文社より刊行された、「いわて旬華愁凍（しゅんかしゆうとう）イーハトーブの国から」。ペー
ージをめくると、茜色に染まる岩手
山、真つ青な海に浮かぶ海霧・ヤマ
セ、雪の上に点々と残ったウサギの
足跡、etc. 岩手の春夏秋冬の風景

が、195ページにわたって掲載さ
れている。
だが、この書籍は単なる写真集で
はない。全ての写真にキャプション
が添えられ、さらに各章ごとに見開
きで作者の思いが綴られている。
このキャプションと文章が実に面

白い。雪をかぶり横たわる巨樹のキ
ャプションには、「雪に眠る 太古の
森で命を終えた巨樹。ふんわりと、
雪が布団をかけて、その命を見送っ
た」。雪どけで水量が増し、勢いよ
く、それでいてゆるやかに流れる滝
の姿には、「春の音づれ 寡黙な山の



岩手に住民票を移し、現在は花巻市東和町で暮らす多賀谷さん。これらの写真は全て花巻で撮影したものだ。「地元の人たちが見慣れている風景でも、切り取り方が変わるだけで普段とは違う魅力を発見できる。絶景と呼ばれる場所で三脚を立てるよりも、何気ない風景を自分なりにどのように切り取るかのほうが面白い」と微笑む。

雪も、饒舌な瀬音となって、春の喜
びをうたい、海へと向かう」。写真を
眺めていると、まるでせせらぎが聞
こえてくるかのよう。言葉の存在が
五感を刺激し、写真がより立体的に
浮かび上がってくる。「写真集」では
なく「写文集」、そう呼ぶ読者がいる
のも頷ける。

この書籍の作者は、写真家であり
大学の英語講師でもある多賀谷真吾
さん。平日は関西の5つの大学で教
鞭をとり、週末に岩手で撮影する。

出身は兵庫。小中学校時代は主に
広島で暮らし、高校は名古屋。岩手
はもとより東北にもゆかりがなかつ
た。ではなぜ岩手に魅せられ、写真
を撮るようになったのか。きっかけ
となったのはスキーだった。

多賀谷さんの大学時代、流行し
たのが映画「私をスキーに連れて
って」。ゲレンデは人でいっぱいだっ
た。どちらかといえばインドア派だっ
た多賀谷さんもスキー場へ。次第に
のめり込んでいき、とうとうスキー
検定1級を取得するまでに。ひとつ
の目標をクリアし、これまでとは異
なるスキーの楽しみ方を模索してい



たとき、ある人物と出会う。その人の名は三浦敬三氏。世界的に有名な冒險スキーヤー三浦雄一郎氏の父だ。プロスキーヤーであり、山岳写真の写真集や著書も数多く出している。

三浦氏は多賀谷さんに言った。「スキーを純粹に楽しむなら、ゲレンデから出て山の中に入りなさい。コースのないところで苦労しながら滑るのが面白い」。三浦氏は青森県八甲田山での山スキーの楽しみ方を広めた人物でもある。足跡ひとつない雪の上を自由に滑る心地よさ。目の前に広がる、迫りくるような自然の姿。多賀谷さんはすぐに山スキーに魅了される。

東北の山々に夢中になる多賀谷さんに、三浦氏は言う。「せつかく普通の人が歩けないような山の上に行っているのだから、良い風景だと思ったら写真を撮ってみたら?」。その一言が、多賀谷さんを写真の世界へと導く。撮影した写真を見た三浦氏は日本山岳写真協会に推薦。入会することになった。

カメラをリュックに詰め込み、山を目指す日々。いつしか東北の中で

だらかな山並みに、夕日が落ちる。黄金色に輝く山々とともに、よみがえるのは下校の音楽だったクラシック。その記憶が北上山系、そして岩手につながっている気がします」

「いわて旬華愁凍」に続き、2014年に「いわて四季彩々―北の大地から」を刊行。前回は少なかった県南地域の風景や、東日本震災前後の三陸の風景も掲載した。震災後の風景でも、多賀谷さんは瓦礫の写真を載せなかった。「友人・知人や地元の人たちのことを考えると、載せる気にはなりませんでした。昔の風景を思い出せないという人のためにも、美しかった頃の風景を載せたいと思いました」



大学での授業風景(2008年撮影)。英語講師と写真家、両方を行うことで見えてくるものがあるという。「言葉を使わなくても、ジェスチャーでもコミュニケーションをとることができます。それは写真も同様であり、見た人に思いを伝えられます。言葉と写真の両方に携わっているからこそ、どちらも大切だと感じています」。岩手の大学で英語と写真の両方を教えられたら…。それが多賀谷さんの夢だ。



2004年12月、「いわて北緯40度エリア写真コンテスト」に出品し、入選した作品「岩手山夕照」。これを機に、多賀谷さんは写真にのめり込む。それまでスキーが目的で訪れていた岩手だったが、冬以外の季節にも足を運び、三陸海岸や田園など、岩手の風景を幅広く追いかけるようになる。

も冬の八幡平に向かう回数が増えていく。2004年、八幡平で撮った一枚、「岩手山夕照」が写真コンテストで入選する。そこから写真への情熱はさらに高まる。1年を通して岩手の風景を追いかけた。人の縁もあり、多賀谷さんは盛岡で暮らすようになる。

多賀谷さんは撮影のために自動車を購入。自動車のナンバーは岩手

岩手に住民票を移し、住まいを花巻市東和町に構える多賀谷さんだが、今なお関西との行き来を続けている。写真家と大学講師、両方を続けることが「気付き」につながるといふ。「写真を撮るときは風景と一対一、一方、大学の講義で向き合うのは40〜50人の学生。全く違う世界を行き来していると、自分を相対化することができると。それが写真、講義どちらにも良い影響を与えてくれていると思います。また、飛行機で移動していると、水がはられた田んぼに苗が植えられていく変化や、ギラギラした大阪の夜景と真つ暗な北上山系の違いを感じ、それが文章のヒントになることもあります」



多賀谷 真吾

写真家、大学講師

1970年、兵庫生まれ。1995年、大阪大学大学院文学研究科修士課程修了(専攻は英文学)。関西の複数の大学で英語講師をつとめるかたわら、休日になると、チョークをカメラにもちかえて、岩手県内を撮影で飛び回っている。2007年から住民票を岩手に移し、県内の自然風景の撮影をライフワークにしている。山ではスキーを、海ではカヤックを撮影の移動手段に使い、独特のロケーションから被写体をねらう。将来的には、専門の語学を生かし、岩手を含む日本の自然風景を、広く海外へ紹介することを考えている。

所属団体は、日本山岳写真協会、日本旅行作家協会、深田久弥を愛する会ほか。

「いわて旬華愁凍」

<http://www.ne.jp/asahi/iwashun/iwashiki/>

岩手らしい写真、地元の人が見て喜ぶ写真が撮りたいという多賀谷さん。今後は英語力を活かし、海外の人たちにも発信していきたいという。だがそれは、岩手・日本を宣伝したい、自分がやらなければという使命感とは異なる。「子どもが海辺できれいな貝殻をみつけて、『これ見て!』と駆け寄るような。そんな気持ちに似ています」

多賀谷さんの写真に写し出されているのは、美しい風景に出合ったときの純真な気持ち。だから、目にしたとき胸がすくような気持ちになれる。その理由が垣間見えた気がした。